

日本語における無生物主語他動詞文の有生性
A study on animacy of transitive sentences with inanimate subjects

山田 勇人 京都外国語大学大学院生

1. はじめに

これまでの日本語における他動詞文に関する先行研究では、他動詞文の主語は人や動物など有生物が一般的であり、そうでない無生物は他動詞文の主語には立ちにくいとされてきた。その一方で、稀に無生物が他動詞文の主語にたつことがあり、これを無生物主語他動詞文と呼び、研究の対象にされてきた。(吉川 1976)(大曾・滝沢 2001)(熊 2009)。

本発表にあたり、筆者は小説やエッセイ¹などから無生物主語他動詞文の収集を試みた。その結果、200例以上の用例を収集することができた。この結果は、無生物主語他動詞文は異例な表現だとは決して言えないことを示している。ただし、無生物主語他動詞は有生物主語他動詞文と比べると、表出の割合には明らかな違いがあるのは事実である。筆者は、日本語において無生物主語他動詞文は決して皆無ではない。しかし、すべての無生物主語が他動詞文を形成できるわけではなく、無生物主語他動詞文が成立するには何らかの要因がある。そのため、無生物主語他動詞文は有生物主語他動詞文と比べ極端に少ないのだと考えられる。

2. 無生物主語他動詞文とは

無生物主語他動詞文とは、「太郎がテレビを壊した」「猿が私の帽子を持っていた」のように有生物を主語とはせず、「津波が町を襲った。」「光が太郎の顔を照らした。」「時計の針が三時を指した」のようにいわゆる無生物を主語にとった他動詞文を指す。

2. 1 先行研究における無生物（主語）の定義

ところで、この無生物について先行研究ではどのように定義されているのだろうか。以下、先行研究における無生物の定義について考える。角田(1991)は、名詞句階層という概念を用いて、無生物主語とは人称代名詞、親族名詞、人間名詞、動物名詞から外れたすべてとなっている。自然の力とあるが、これは「津波」「台

¹筆者が収集した用例の出典は、以下の通りである。本文には（ ）内の省略で表示。（ ）の数字はページを表示。『私の引き出し』吉村昭（『引きだし』）、『深夜特急 2,3』沢木耕太郎（『深夜 2,3』）『怪笑小説』(怪笑)『分身』(『分身』) 東野圭吾『天北原野（上）（下）』三浦綾子（『天北』）『プリンセス・トヨトミ』（万城目学）（『トヨトミ』）その他、インターネットから収集した用例についてはホームページを表示している。

風」といった名詞句を指す。よって、「津波」などは無生物主語に属することになる。斉藤(2003)は角田の定義に準じている。

熊(2009)は無生物主語を次のように定義している。「『無生物名詞』とは、人または動物ではないものと捉える、そのため自然科学では有生物と考えている植物(例：木)や生産物・道具(例：布)などの具体名詞、自然現象(例：雨)、抽象名詞(例：説教)などが調査の対象となる」。表現は異なるものの、結果として無生物主語となる名詞句は角田と同様である。

このようにこれら先行研究においては、無生物とは非常に簡潔に言えば、「『人』『動物』以外のもの」という捉え方がされている。

2. 2 大曾(2001)による他動詞文の分類

次に、他動詞文に目を向けたい。大曾・滝沢(2001)は、他動詞文を主語と目的語の関係から下記のような分類を行っている。

大曾・滝沢(2001)による他動詞文の分類

1	動作主他動詞文	学生がパソコンを壊した。	有生物主語
2	不変化他動文	子供たちが戸をたたいた。	有生物主語
3	中立的他動詞文	観衆は音のする方を見た。	有生物主語
4	自然現象他動詞文	津波が海浜の部落を襲った。	無生物主語
5	無意志主語他動詞文	明は免許証をなくした。	有生物主語
6	経験者他動詞文	国民は選挙法の改正を喜んでいる。	有生物主語
7	原因他動詞文	過度の野心が彼の寿命を縮めた。	無生物主語
8	道具他動詞文	白い布が机を覆っている。	無生物主語
9	優位関係他動詞文	この提案は問題を含んでいる。	無生物主語
10	場所他動詞文	川が町の中心を流れている。	無生物主語

大曾は、この10分類の中で、4.自然現象他動詞文,7.原因他動詞文,8.道具他動詞文,9.優位関係他動詞文,10.場所他動詞文の5つのタイプにおいて無生物主語が可能になると述べている。無生物主語だけで見るのであれば、無生物主語にはこの5つのタイプがあり得るということである。大曾もまた、無生物主語とは人や動物といった有生物主語ではないものという捉え方をしている。しかし、筆者にはこの分類に違いが見えにくい点がある。それは、1動作主他動詞文及び2不変化他動詞文と4自然現象他動詞文の違いである。

- ・学生がパソコンを壊した。(動作主他動詞文)
- ・津波が海浜の部落を襲った。(自然現象他動詞文)

この2つの文の違いは、「学生」と「津波」といういわゆる有生物か無生物の違いしかない。対象の「パソコン」と「部落」に働きかけをし、その対象に変化

をもたらしたという点においては何の違もない。しかも、これは動きのない物が擬人的にあたかも動きのあるように表現されたものではなく、津波という動きのあるものが部落に影響を与えたという点ではまぎれもない同一の他動詞文と考えても良いのではないだろうか。もちろん、主体の意志性などの違いがあるのだから、1 動作主他動詞文と4 自然現象他動詞文に分類することに異論はない。しかし、大曾の言う動作主とそうではない非動作主（ここでは自然現象）の境界線はどこにあるのだろうか。

大曾は自然現象他動詞文と命名し、自然現象と限定しているが、大曾の言う無生物が、対象へ働きかけをし、影響を及ぼしている他動詞文は、必ずしも自然現象だけにとどまらない。用例1~4²は筆者の小説から収集した無生物主語が対象へ働きかけをしている例である。

1. 飛んできた枯れ枝が、完治の二の腕を打ちつけた。
2. 新幹線のモーターの音が、プラットフォームの空気を細かく震わせている。
3. 大きな古時計がボンボンとくぐもった音を立てた。
4. ストーブの火が、兼作の顔を明るく照らした。

用例1は、主語である「飛んできた枝」が目的語にある二の腕に対し、働きかけをしている。用例2~4も無生物主語と言えるが、その無生物自身が動きを持ち、その動きによって目的語に実際の影響を与えている。2は、音が実際に空気を振動させている事実があり、いわゆる擬人法というわけでもない。用例3、4も同様である。この対象に働きかけをしているという点においては、まさに他動詞らしい他動詞文といえるのではないだろうか。

このように、無生物主語の中には、人間といった有生物と同じように動きがあり、何かに働きかけを行い、場合によっては変化を与えるものも存在するのである。

ここで問題になるのが、「人」や「動物」といったいわゆる有生物と、自然現象や「飛んできた枯れ枝」「モーター音」などのいわゆる無生物の違いはどこにあるのだろうかという点である。

そこで、筆者は、角田、熊といったこれまでの先行研究における「人や動物」以外のものを無生物主語とするという一括りの解釈を再度見直してみたいと思う。この点の解明こそが、無生物主語他動詞文が成立する要因の解明につながると考えるからである。

3. 有生物・無生物から有生性の有無で他動詞文の主語を捉える

²変化をもたらしていないので、大曾の分類ではaではなくbの不変化他動詞文ということになるだろう。

ここでは改めて他動詞文の主語となり得る名詞句とはどのようなものか考えてみたい。これまでは、他動詞文の主語は「人」や「動物」といった有生物が一般であり、そうではないいわゆる無生物は他動詞文の主語にはなりにくいとされてきた。だからこそ、無生物主語他動詞文の特異性が議論の対象となってきたわけである。

筆者は、この有生物か無生物化という二対立は、他動詞文の主語の特性を捉えたものとしては不十分ではないかと考える。これは、先に述べた用例1～4の存在がその不十分さを説明しているのではないだろうか。

私は、他動詞文の主語となる特性は、有生性(animacy)³の有無であるという捉え方をしたい。

有生性は生きているか否かという一つの特徴で判断するものではない。有生性を有する最たる例は、確かに「人」「動物」ということになるが、「人」「動物」だけではない。これまで無生物主語と一括りにして考えられてきた名詞句の中にも有生性を有するものがあり、そういうものは対象に働きかけをする他動詞文らしい他動詞文を作ることができる。つまり、上記に挙げた「とんで来た枯れ枝」のような他動詞文が形成される。

では、どのような名詞句が「有生性」を有すると言えるのだろうか。筆者は、主に小説からいわゆる無生物主語他動詞文を211例収集し、その主語となる名詞句を考察した結果、次のような特徴があるものは有生性があると考えた。

第1の特徴「主語となる名詞句が生命力を有する」

第2の特徴「主語となる名詞句自体に動きがある」

第3の特徴「主語となる名詞句に人の背後がある」

第4の特徴「主語となる名詞句に、対象に影響を及ぼす能力がある」

4. 有生性の特徴

以下、有生性の特徴について詳しく述べる。

4. 1 第1の特徴「主語となる名詞句が生命力を有する」

これは、最たる有生性の特徴であると言える。これまでの有生物の捉え方において、この有生物はこの特徴を有したものである。「太郎はテレビを壊した。」の「太郎」、「猿が私の帽子を持って行った」の「猿」のような類である。これまでの有生物と無生物の違いは、この特徴を有するか否かの分類になっている。

³ 有生性の定義を、言語学辞典や日本語学辞典などで調べたところ、明確に定義をしたものは見られなかった。

そして、無生物主語他動詞文の研究対象はこの特徴を持たないものすべてを研究の対象としてしまっている。

4. 2 第2の特徴「主語となる名詞句自体に動きがある」

次に挙げるのが、「主語となる名詞句に動きある」という点である。他動詞文例5~9の主語は第1の特徴は有していないものの、それ自体に動きがあるため、他動詞文を形成していると考えられる。

5. (化学反応し続ける) マグネシウムは、軽い爆発音のような音を立てて、強い光を放ち、白煙を立ちのぼらせる。(引き出し195)
6. 夕餉の仕度の煙が立ちのぼり、霧のように集落を覆っている。(深夜9)
7. ヤマセと呼ばれる強風は、波を荒れ狂わせるのだ。(天北19)
8. 吹雪はたちまち道を覆いつくす。(天北60)
9. ストープの上の(お湯が煮立った) 鉄瓶が静かに音を立てている。(天北141)

これらの用例⁴における主語「(化学反応をし続ける) マグネシウム」「煙」「吹雪」「(お湯が煮立った) 鉄瓶」は、いわゆる無生物であっても、それ自体に実際の動きがあるため、他動詞文を違和感なく形成していると考えられる。

「動きがある」ということは有生性において重要な特徴であると考えられる。というのも、明らかな物名詞であっても、その物自体に動きがあれば、多くの場合、対象に働きかけが可能になり、他動詞文の形成が可能になるからである。⁵

「動きのある」名詞句にはいくつかの属性に分けられるが、その中で多く見られるのが、「津波」「大雨」「吹雪」といった自然現象である。そのため、これまでの先行研究では無生物主語他動詞文といえは津波や台風といった自然現象の文が第一に挙げられてきたのだと考えられる。

4. 3 第3の特徴「主語となる名詞句の背後に人がいる」

第3の特徴として「主語となる名詞句に人の背後がある」ことを挙げたい。用例がこの特徴を有している。

10. 何とも言えぬ悲しみが、あたしを襲った。(分身398)
11. 彼等の軽率な行動が現在の状況を作り出した。(分身369)
12. あき子の手紙は孝介を驚愕させた。(天北172)
13. 黒い煙を吐きながら、ゆっくりと遠ざかる船(天北87)

⁴第1の特徴を有しているものの多くは、この第2の特徴も有している。ここで挙げた用例は第1の特徴は有しておらず、第2の特徴を有して、有生性を有している例を挙げた。

⁵「マグネシウム」だけであれば、動きはないが、ここでは「化学反応し続ける」という文脈があることによって、動きを有している。「鉄瓶」も同様である。

これらの名詞句には「人」が背後いると考えられる。それを敢えて表現するなら、「(私自身が感じ出した) 悲しみ」「(彼が起こした) 行動」「(あき子が作り出した) 手紙」「(だれかが操作する) 船」となるだろう。

天野(2001)は、動作主を二格で表す受動文において受身の主語は有生物が一般的であるが、潜在的受影者が想定される場合 (a.誰かの所有物 b.身体部分 c.行為を表す名詞) は無生物主語も可能であるとしている。ここで言う「人の背後」があるというのは、この考え方におおむね共通するものである。

4. 4 第4の特徴「主語となる名詞句に、対象に影響を及ぼす能力がある」

第4の特徴として、「主語となる名詞句に、対象を及ぼす能力を有する」ことを挙げたい。第1、第2の特徴を有するものは、この特徴も有する場合がほとんどである。ここでは、まず第3の特徴をより明らかにするため、第1、2の特徴は有していないが、この特徴を有することによって他動詞文の主語となっている例を挙げる。

14.店内の淡い光が、その顔に陰影を作っている。(深夜 101)

15.空を透過した日射しが、大輔の顔を白く照らしても、何ら肌に熱を感じなかった。(トヨトミ 168)

16.ストーブの火が、兼作の顔を明るく照らした。(天北 28)

17.灰は30センチ以上も積もって、木々や作物を枯らした。(吉川の例文より)

この用例中の名詞句「光」「日射し」「ストーブの火」「(降り積もった) 灰」は生命力もないし、動きがあるわけではない。しかし、動きはないものの、対象に影響を及ぼす能力をもっていることが他動詞文を形成していると考えられる。これは、この名詞句に対象を変化させる特徴があるからであると考えられる。

5. 有生物と有生性

以上のことから、これまで有生物以外のものを一括して無生物主語他動詞文とされていたものの中には、実は有生性を有するものが多くあり、有生物主語他動詞文と近いものが多く存在することが分かる。下記の表1は有生物と有生性を具体例で示したものである。網掛け部分のように、無生物ではあるものの、有生性の特徴を有しているため「人・動物」といった有性物に近いものがあり、この名詞句が主語となって他動詞文を形成していると考えられる。一方、特徴を有していないもの、ここでは「泥」「鉛筆」を例に記したが、これら単体では有生性の特徴を有していないため、通常は他動詞文の主語とはなり得ない。

しかし、この「泥」も「撥ねた泥」となれば、「撥ねた泥が私の大切な服に汚れを付けた」のように他動詞文を形成しやすくなる。これは、「撥ねる」ということで

「動き」という有生性の特徴を持ったためだと考えられる。

表 1 * 網掛け部分は無生物だが有生性がある例

有生物	人・動物		物
有生性	人	飛んできた枯れ枝	特徴を有さないもの
	動物	悲しみ	泥
		陽射し	鉛筆

筆者は、この点を実証するため、日本語母語話者 20 人にアンケート調査を行った。日本語母語話者に「泥が私の服を汚した。」「撥ねた泥が私の服を汚した。」は自然な文かと尋ねたところ、「撥ねた泥」と有生性をもった文のほうは、自然な文であると答えた人が 13 人と半数を超えた。一方、主語に有生性がない「泥が私の服を汚した。」を自然と答えた人は 3 人しかいなかった。

また、有生性の特徴を持つ名詞句を主語にして他動詞文を作り、同じように日本語母語話者に自然かどうかを聞いたところ、次のような結果が出た。

- 1) 風が花子のスカートを乱した。(自然 15・やや自然 5・不自然 0)
- 2) この交差点ではオートバイが子供をはねるという事例が多発している。
(自然 20・やや自然 0・不自然 0)
- 3) 電球の光が太郎の顔を明るく照らした。(自然 17・やや自然 3・不自然 0)
- 4) ドアのでっぱりが子供の足を傷つけた。(自然 0・やや自然 6・不自然 14)

これらの調査結果は、有生性の特徴を持つものは、無生物であっても他動詞を無理なく作ることができることを示しているのではないだろうか。

また、下記のような用例も検索することができた。

18.うちの实家では犬を飼ってるんですが、こういう雨の日のお散歩ってとても大変なんですよ。雨で体が濡れるのもありますし、結構跳ねた泥水がお腹を汚したりするんです。(http://blog.livedoor.jp/a8chaos/archives/8565182.html)

以上のことから、無生物主語他動詞文がなりたつ 1 つのケースは、主語となる名詞句が有生性を持つ無生物名詞の場合と言える。

6. 有生性を持たない名詞句を主語とする他動詞文

次に、有生性が低いにもかかわらず、他動詞文を形成している例について考察する。無生物主語他動詞文がなりたつケースは一つの側面だけではとらえられないと考える。本項では、文脈という面から無生物主語他動詞文を考える。

筆者は、無生物主語他動詞文を主に小説から収集した。これは、小説において会話などの用例より多くの無生物主語他動詞文が見られるからである。では、なぜ小説において無生物主語他動詞文が多く見られるのだろうか。筆者はこれを、小説には情景描写が多いことがあるためだと考える。情景描写は、視点がモノに

いくことが多いため、いわゆる無生物を主語にした文が多く見られる。

しかし、その情景描写は自動詞文だけでなく、他動詞文を使った例が多く見られる。用例 19～21（いずれも『トヨトミ』）はその例である。

19.幸一はクスンと鼻を鳴らし、調査官がドアを見つめていた。いかにも分厚そうな、重々しい色合いのドアが、鈍い光沢を放ち、静かにたたずんでいた。

20.大輔は力なく口を開き、眼前の光景（天守閣）を仰ぎ見た。(中略)、雄大な天守閣が、真っ赤に燃える夕焼けを支配していた。

21 鳥居はフンと鼻を鳴らし、車内清掃中ののぞみに視線を向けた。新幹線（のぞみ）の窓は縦列で進む松平、旭、鳥居の姿を映していた。

網掛けが無生物主語他動詞文となっている。その中の下線部が主語になっているが、いずれもその主語に有生性はない。

この文脈においては、これらの無生物主語他動詞文が現れても違和感はない。しかし、この網掛け部分の他動詞文が突然何の前置きもなく現れたら違和感があるのではないだろうか。

ところで、なぜこの文脈においては有生性のない名詞句を伴って、無生物主語他動詞文が現われているのだろうか。

これは、小説などに見られる言わば一つの技法のようなものだと考える。「ドア」の文で説明すれば、話し手が「ドア」に焦点を当てその「ドア」を中心に表現したものと言える。しかも、この文において、「ドア」が意図的に、「光を放つ」という行為をしたわけではなく、話し手にはそう感じられたという意味である。

このような無生物主語他動詞文が現れるのには、ひとつのパターンがある。まず、話し手が対象に焦点を当て、次にその焦点が当てられた対象を主語にして他動詞文が形成されるというパターンである。用例 19 で言うなら、話し手が「ドア」に焦点を当て。その「ドア」を焦点にした文が現れている。

同じような過程をたどれば、用例 19～21 のように有生性の低い名詞句でも他動詞文を形成することは可能になる。以下は筆者の作例である。

作例 1:花子は大きなダイヤのネックレスを首からぶら下げている。そのダイヤが彼女の姿をより華やかなものにさせていた。

作例 2:あの店は薄暗くて、雰囲気も決して心地よい物ではなかった。そして、この雰囲気が私の食欲をいっそう減退させた。

この二つの文を日本語母語話者に聞いたところ 9 割以上の方が自然であると答えている。しかも、このパターンにおける無生物主語は有生性が見られない名詞句であっても他動詞文を作ることが可能である。

筆者が小説から収集したいわゆる無生物主語他動詞文の中で、有生性が見られない名詞句を主語にした他動詞文を見ると非常にこのパターンが多く見られる。また、このパターンの無生物主語他動詞文は、実際に主語が対象に対し働きかけ

をしているものではないというのも、5. で考察した有生性のある無生物主語他動詞文とは異なる点と言えるだろう。

では、話し手がものに焦点を当て、焦点を当てたものを主語にして文を作るのに、なぜ自動詞文を使わずに他動詞文を使うのだろうか。筆者はその理由を次のように考える。有生性が見られない名詞句をあえて主語にして他動詞文を作ることによって、その名詞句があたかも、生命があり、自分自身の動きによってその動作を行っているかのように示し、文章に躍動感があるニュアンスを持たせるのではないだろうか。

6. 1 自動詞文との比較

先ほどの作例は、下記のように他動詞文と自動詞文両方で表すことができる。

- ・花子は大きなダイヤのネックレスを首からぶら下げている。このダイヤが彼女の姿をより華やかなものにさせた。(他動詞文)
- ・花子は大きなダイヤのネックレスを首からぶら下げている。このダイヤで彼女の姿はより華やかなものになった。(自動詞文)

しかし、その両文にどのようなニュアンスの違いがあるか日本語母語話者に聞いてみたところ、他動詞文の方は、「ダイヤのおかげでもっと輝きが増したという感じが強くなる」「ダイヤが花子を引き立たせる印象が強い」「躍動感がある」のような意見が出た。さらにどちらがより自然かと聞いたところ、9割の人が他動詞文のほうが良いと答えている。このパターンの表現が日本語母語話者にとって心地よい表現だということが言えそうである。無生物主語他動詞文は日本語において特殊なものであるということを言う先行研究は多いが、このように無生物主語他動詞文が好まれて使用される場合もあるというのは興味深い。

7. まとめ

最後に、日本語において無生物主語他動詞文が現れるケースについてまとめた。

まず一つ目は、一括りに無生物とまとめることはできず、無生物にも非常に有生物に近いものがある。そして、それを有生性の有無という言葉で説明した。有生性が見られれば、これまでの概念で言うところの無生物であっても、それを主語として他動詞文を作ることが可能になる。

二つ目は、有生性が見られない名詞句を主語にした他動詞文である。このタイプの他動詞文は小説に見られる技法のひとつと言える。特定のパターンの中で、他動詞文を用いることで、あたかもその名詞句自体に有生性があり、その名詞句によって引き起こされたかのような印象を持たせる。そのため、小説などでは、それを躍動感などを持たせる表現として用いている。

本発表は、無生物主語を主語の特性の面、そして、1文レベルではなく前後の文も合わせた談話レベル面から考察を行った。無生物主語他動詞文は、その成り立ちがさまざまな要因に起因している。本発表では触れられなかったが、動詞が要因となっているものもある。今後はさらに、それらの要因を明らかにするとともに、それぞれの要因がどのように関わりあっているかについても考察を試みたい。

参考文献

- ・天野みどり(2001)「無生物主語のニ受動文—意味的關係が必要な文—」『国語学』52巻2号国語学会
- ・大曾美恵子、滝沢直宏((2001)「日本語における他動詞文の主語の有生・無生」『日本語電子化資料作成—コーパスに基づく日本語研究と日本語教育の応用を目指して— (平成12年度名古屋大学教育研究改革プロジェクト報告書)』
- ・斉藤伸治(2003)「視点と日本語の無生物主語」『岩手大学人文社会科学部紀要』72号岩手大学
- ・角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 吉川武時(1976)「無生物主語をめぐる問題点について」『日本学校論集3号』東京外国語大学附属日本学校
- ・熊鷹(2009)『鍵がドアをあけた 日本語の無生物主語他動詞文へのアプローチ』笠間書院